

編集後記

病自慢という言葉があります。年取ってきたら人間どころかしらガタがきます。同窓会などで、おれはあそこが、おまえはそれくらいなら大したことないな、おれはこんなに大変だ、等々。

先日の日核春季大会半ば頃から、右目がうっすらと白いもやが掛かったようになり、見にくくなりました。週が明けて、仕事機のモニターに向かっても右目がぼんやり。痛みなど付随症状はなし。ネットで調べると、ぶどう膜炎？ などといういやな言葉がでてきます。最初に目に入ったのはベーチェット病。どきっとしましたが、他に症状はないし、これではなさそう。サルコイドーシス？ これはあり得るかも。他、原田病、よくわからん炎症。4-5日様子を見ても変化ないので、本日眼科受診しました。最近の眼科は器械だらけですごいですね。網膜とそのうしろのぶどう膜の層構造が簡単に画像で出てきました。その他、他の患者さん達と一緒に廊下の長いすで待機して、いろんな装置で種々のデータを取っていただきました。眼底も広い範囲をオートで撮像するのですね。ここまでの検査で、硝子体混濁がありますねえと、眼底は最後に先生がご自分の目で丁寧に再度確認されました。結論は、加齢による硝子体剥離ですと。網膜剥離には至っていないようでしたが、今後リスクが少しあり、しばらく経過観察と相成りました。ここ数年、偏頭痛がでるは、帯状疱疹になるは、膝が痛いは、やれやれです。

さて、「核医学」は2013年に第50巻をむかえ、同巻第4号に記念の短文を掲載いたしました。「核

医学」は病におかされたわけではありませんが、論文発表の場としての役割の多くはANMに移行しており、この目的の役割は終えていると感じます。そうかと言って、和文論文掲載のニーズが完全になくなった訳ではなく、症例報告の場として、あるいは看護師などの方々の発表の場としての機能を残すことが重要です。その方向として、「核医学」を広報誌（ニュースレター）化し、論文掲載機能はJ-stageに移行することを数年前から提案してきました。論文（地方会・分科会などの抄録も）をJ-stageに掲載することにより、検索に掛かりやすくなるなど、核医学のアピールに貢献してくれることに加え、総合的に必要経費もいくらか圧縮できるであろうと試算しています。本年4月の理事会で、これを最終的に了承していただきました。

今後、最終的な調整を行った後に、次年度からそのような運用としたいと考えています。しばらく混乱するかもしれませんが、長い目で見ればプラスになるはずですよ。どのような組織でも、ずっと同じままでよいとは思いません。ANMがインパクトファクターを向上してきた要因の一つは、種々の取り組みを行って来て、会員の皆さんがそれに答えてくれたからであると思います。学会本体も、近年対外的活動を活発化させることによって、核医学の世界における我が国の存在感を強化してきています。会員の皆様におかれましては、「核医学」の変革にもご理解をいただきますようお願い申し上げます。

（金沢大学 絹谷 清剛）

「核医学」第52巻2号 平成27年5月29日発行 本号定価（本体価格1,800円+消費税）

編集兼発行者 絹谷 清剛

〒113-0021 東京都文京区本駒込2-28-45 (公社)日本アイソトープ協会本館3階

発行所 一般社団法人 日本核医学会

振替口座 00180-5-741770 番

電話 (03) 3947-0976 FAX (03) 3947-2535

E-mail : anm@xvg.biglobe.ne.jp

ホームページ : <http://www.jsnm.org/>

印刷所 株式会社 海川 企画

〒116-0013 東京都荒川区西日暮里5-32-5 ウシオビル3階

電話 (03) 3806-0961 (代) FAX (03) 3806-0848

広告申込所 〒102-0071 東京都千代田区富士見2-12-8 電話 (03) 5226-2791 (代) 日本医学広告社